

柿 生 文 化

柿生郷土史料館 情報・研究誌

住所：川崎市麻生区上麻生 6-40-1

柿生中学校内

電話：070-1503-6401/044-988-0004

<https://kakio-kyoudo.jp.org/>

第 202 号

古老は語る
宮野薫さんのお話 8

岡上の人々と戦後の暮らし (その 2)

(聞き手、筆録、コメント＝小関 和弘(柿生郷土史料館専門委員))

* どんど焼きについて。

昭和 30 年代半ばまでセエノカミと言って、どこの集落でも 2、3ヶ所でやり、作るのも燃やすのも小学生がやった。昭和 40 年代になり大人がやるようになった。町会があちこちでやるようになってから「どんど」なんて言うようになった。昔はどこでも「セエノカミ」って言っていた。

セエノカミは講中ごとに作った。川井田は 14 軒で、昔から男の子しか作らなかった。私(宮野薫さん)が昭和 11 年に小学校に上がって、12 年の正月の時には高等科 2 年が 1 人、高等科 1 年が 1 人、小学校 6 年と 3 年と私が一緒に 5 人。それが翌年は高等科の一番上の人が卒業で抜けて、下が入って来ないから、川井田講中の男の子供は 4 人になっちゃった。学校から帰ってくるとセエノカミを作るってするので山に入って材料を切り出した。

昔は子供でも親の手伝いをさせられて鎌を持ったりしてたから出来たんだろう。大人は全然見やしない。子供が作るんだから、今のやぐらの三分の一、五分の一くらいのものでした。高さは 1m50 cm くらいのものでした。山から木を切ってきて、周りに杭を 10 本ぐらい打って、竹は孟宗竹でなく、うち(薫さんの家。屋号は「セド」)やシンヤ(宮野静子さんの家)の藪の淡竹を使った。細いからモウソウみたいには高くない。4、5 日かけて作って、14 日(14 日に決まっていた)の夕方に子供が「燃っつけんゾォ」なんて怒鳴って歩いた。

やぐらを作る前に家々を回って、松の内が終わって外した正月のお飾りを集めた。大体 1 戸 10 銭くらい貰えて、シンヤで 50 銭だったか、沢山もらってビックリしたのを覚えている。集めたお金を持って能ヶ谷の「まんじゅうや」っていう菓子屋に行った。そこで上級生がお菓子を買って、「やぐら」を作った子供たちで分けて、そんなのが楽しみだった。

今は「暖衣飽食」になったって言うか、「これが美味しい！」っていう感動、感激がなくなっちゃったね。

初めてバナナを食べた時なんか、「こ～んな美味しい食べ物なんかあるんだなあ」って思ったくらいだった。カステラもそう。子供のころ、隣のシンヤに遊びに行った時、京橋の親戚(保さん)が持ってきたので、「これがカステラっていうもんだ」なんておばさんが切ってくれて、それを口にしたら凄く美味しい。いつもはセンベイくらいしか食べてないからねえ(笑)。

ウチなんか兄弟が大勢だったから、ご飯の時、一つ卵に醤油をいっぱい入れて辛くして弟と半分ずつ分けて食べた。それに毎朝卵を食べるなんてこともなかった。卵は貴重だったから、昔は病氣見舞いに卵を持って行った。クッションがわりに粍殻を詰めた箱に卵を並べてね。

・川井田のかつての「セエノカミ」について詳しく語っていただいた。薫さんから最初に頂いた「メモ」では 2 行半ほどの記述だったが、聞き取りのサポートをして下さった満里子さんと筆者からの質問に即してお話し下さった。だんご焼きのことや着火(マッチだったとのこと)についてもその後、補足していただいた。子供の祭りだったことは常々聞いていたが、たった 4 人でやぐらを作った年もあったというのは初耳だった。日頃の手伝いで鎌や小刀など、刃物の扱いに慣れていた子供たちが生き生きと山からハチクを切り出した様が眼に浮かぶ。暮らしと祭りとの関わり奥深さを示してくれる薫さんの感懐である。

・川崎市市民ミュージアム編『川崎の民俗～水と共同体(村の水)～』(1988 年)は「川崎のセエノカミ」の章を設け、中央に囲炉裏を設え 20 人以上が入れる大きさの登戸・台和地区のセエノカミ小屋をはじめ、市内各所のセエノカミの写真を掲げる。いずれも薫さんが子供の頃のものに比すと巨大なやぐらとなっている。

・岡上は 1889(明治 22)年の町村制施行以前から川井田・谷戸・上・下の四つの講中に分かれていた。「講中」は「講を作って神仏に詣でる仲間」との語義が一般だが、岡上では「村>講中>組合」という各単位の中の一つとしても使われた(田中宣一「村・講中・組合内の家々の関係～川崎市多摩区岡上の場合」(『川崎市文化財調査集録 12』1976 年))。

(続く)



岡上「上、下地区」のセエノカミ。昨今のもよりだいぶ小さいやぐらである。1960 年頃、岡上神社境内にて。(撮影：薙沢孝雄氏)

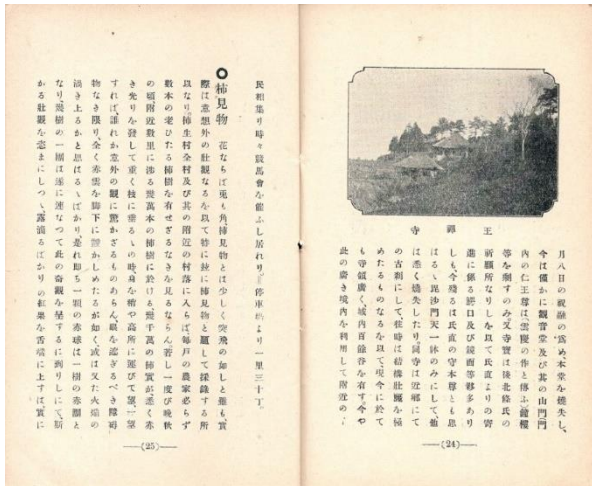
シリーズ
禅寺丸柿の歴史 12

近代における川崎市域及び横浜市北部地域での果樹栽培(12)

相澤雅雄(都筑・橘樹研究会会員)

横浜鉄道沿線案内と禅寺丸柿

横浜線は、明治 41 年 (1908) 9 月 23 日に横浜鉄道株式会社によって東神奈川駅と八王子駅を結ぶ路線として開業した鉄道である。この開業によって甲信地方から横浜に向けて生糸、織物、薪、炭、木材、石材などが、反対に横浜からは八王子に向けて、塩、砂糖、石油、酒、醤油、鉄類、魚類など日常必需品がそれぞれ輸送された。鉄道の開業以前は、人の肩や車馬によって荷物を長時間かけて運んでいた。この不便を解消するために敷設された鉄道である。さらに開業によって沿線の殖産興業の発達も大いに期待された。今回は、この横浜鉄道に関係した 2 冊の沿線案内に禅寺丸柿がどのように採り上げられていたかを探ってみた。



王禅寺と柿見物 (『沿線遊覧案内』
明治 41 年 (1908) 9 月刊) 筆者蔵

1 冊目は、明治 41 年 9 月刊の『沿線遊覧案内』(大きさは、縦 14.8cm、横 9 cm、全 67 頁)で、横浜鉄道(株)の発行になる。開業記念品として株主や沿線の有力者に配布されたものである(相沢菊太郎著『続々相沢日記』)。本書の長津田駅の項で、王禅寺、下麻生の不動尊、深見の佛導寺、海老名の国分寺、深見神社、海老名の龍峰寺(国分北二丁目所在)の木造千手観音とともに「柿見物」を紹介している。この沿線案内は、今日では、一般的に見ることができない稀書のため、「柿見物」の記事を抄出し、参考に供することとする。

「柿見物 花ならば兎も角、柿見物とは少しく突飛の如しと雖も、實際は意想外の壯觀なるを以て特に茲に柿見物と題して採録する所以なり、柿生村全村及び其の附近の村落に入らば毎戸の農家必らず數本の老ひたる柿樹

を有せざるなきを見るならん。若し一度び晩秋の頃、附近數里に渉る幾萬本の柿樹に於ける、幾千萬の柿實が、悉く赤き光りを發して重く枝に垂るゝの時、身を梢や高所に運びて望、一望すれば、誰れか意外の觀に驚かざるものあらん、眼を遮ざるべき障碍物なき限り、全く赤雲を脚下に襲かしめたるが如く、或は又た火焰の渦き上るかと思はるゝばかり、是れ即ち一顆の赤球は一樹の赤團となり、幾樹の一團は遂に連なつて此の奇觀を呈するに到りしにて、斯かる壯觀を恣まにしつゝ、露滴るばかりの紅果を舌端に上すは實に異風の清遊と云ふべし。此の附近に産するものを王禅寺柿又は禅寺丸と云ひ、昨四十年には都筑郡のみにて二十萬圓を産出したる由にて、其の大部分は以前王禅寺村、上麻生村、下麻生村と稱へたる、今の柿生村より出づるものなり」

2 冊目は、大正 2 年 (1913) 10 月に東京府八王子町八木(現・八王子市)の實益社からだされた『横濱鐵道沿線探勝遊覧の友』という本で、編集兼発行者は足利榮子(蘆菴)である。序文は原田時之助(安齋)が筆をとっている。編者は自序に「横濱鐵道沿線、名勝、舊跡尠ならず、然れども只僅かに一二の勝地、二三の社寺有るを知りて、而して其他を知らざるは何ぞや(後略)」と考えて、いかなる小さな丘、小さな社寺も実地探査し、縁起も詳しく調べ、また勝地附近の旅館や休憩所も案内し、まとめあげたと記している。本書も今では、容易に見ることができないので、禅寺丸柿に関する部分を次に抄出しておくこととする。

「柿の名所 當駅より北方一里三十一丁の處に柿生村と稱する村落あり、當所は柿の産地として有名なり、中にも字王禅寺村は禅寺丸と稱する甘柿を産し風味は美なり。若し夫れ秋季此地に杖を曳かば、茅屋を繞れる柿樹の果實は其枝折れんはかりになり、熟し一霜に過へば其葉は紅葉し、一村紅の村と化し又一人の眺めあり」(文中のピリオドとカンマは筆者による)。紅葉に染まった村全体と朱色に熟した禅寺丸柿とで奇觀をなしていると言う。111 年前の多摩丘陵に開けた谷戸が深く入り組んだ秋景色である。このパノラマは、橘樹郡大師河原村一帯で、桃の花がピンク色の絨毯を敷いたようになる眺めと双壁をなしていたとも言えよう。

(続く)

シリーズ
歴史の中の女性像

その 1 ナイチンゲールの世界 (18)

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

王立統計学会と第 4 回国際統計会議

フローレンスは、本稿の第 16 回と 17 回に記したグラフを含む『報告書』の「付録第 72」を小冊子として出版し、2 千部ほど印刷して関係筋に配布しました。『イングランドの一般市民の死亡率と比較したロシア戦争時における英国陸軍の死亡率～統計とグラフ付き～ 陸軍の衛生状態の悪化を規制するための勅選委員会報告書の抜粋』と長いタイトルを付けたこの冊子は、ヴィクトリア女王やロイヤルファミリー、内閣の閣僚たちや補佐官、有力議員、さらに各地に派遣された軍医や司令官などに、幅広く配布されたのです。この小冊子は英国内外の統計学者の間でも注目を集め、誕生して間もない王立統計学会 (Royal Statistical Society) は、1858 年秋に開いた理事会において、フローレンスを学会のフェローとして推薦することを決め、正式に彼女を迎え入れたのです。推薦理由は「英国陸軍の衛生改革への統計的手法の活用」とされました。時代は 19 世紀半ばです。大学という高等教育機関に女性が受け入れられることすらまだあり得なかった時代です。そういう時代ですから、歴史の浅い統計学会においても、フローレンスを正規の学会員として迎え入れる事はできなかったのです。一方で誰もがフローレンスの業績に敬意を払い、彼女の統計学者としての実力は高く評価していたのです。こうして正規の会員ではないが、会員に近い権利を持つフェローとすることで、ミス・ナイチンゲールを統計学者と認めたのです。

フローレンスの統計学への貢献を高く評価している人物の 1 人に、彼女が尊敬してやまないアドルフ・ケトレ博士があります。本稿の第 3 回に記したことですが、フローレンスはケトレ博士が著書で強調していた「平均」の考え方に感銘を受け、統計学を学ぶための前段階として、数学を学ぶことを志したのです。当時ベルギーのブリュッセルに居を定めていたケトレ博士は、統計学の国際的な発展を願って、1853 年に当地で国際的な統計会議を開催したのです。会議は 26 カ国から 150 人近い学者が参集して大成功を収めたのです。この場合の名称を国際統計会議 (International Statistical Congress 略称 ISC) ^(註) と定め、ケトレ博士を議長に選出し、2 年に 1 度各国持ち回りで大会を開くことを決めたのです。第 2 回会議は 55 年にパリで、第 3 回は 57 年にウィーンで開かれ、第 4 回会議が予定より 1 年遅れましたが、1860 年にロンドンで開かれることになったのです。王立統計学会のフェローとして、フローレンスも準備会合に招かれました。その席で憧れのケトレ博士と初めて顔を合わせることが出来たのです。ケトレ博士は会合の席で、ミス・ナイチンゲールに病院統計の標準化について考えていることを、登壇して提起するよう強く勧めたのです。フローレンスにとって願ってもないチャンスでした。大会の席で彼女は、「統一的な病院統計を作成するための調査形式のモデル」と題して発表し、調査モデルを提起したのです。非常に野心的な提案で、モデルは良くできていると評判になりました。同じ形式で全ての病院が死亡統計をとって公開すれば、治療技術の向上に大いに役立つだろうと期待されたのです。この提案を検討した分科会は、フローレンスが示した標準調査モデルについて各国政府に協力を依頼する決議を採択したのです。フローレンスは、国際統計会議のお墨付きを得て、病院統計の標準化に関する提案を各国の病院や医師に送ることが出来たのです。

しかし、統計学会の賛同を得ても、医療機関や医師たちの賛同を得ることは困難を極めました、病院ごとに、或いは地域ごとに死亡統計や患者のカルテの様式が違っていたのです。そのためフローレンスの提案が日の目を見るには、さらに長い年月が必要だったのです。

(注) ISC は 1885 年に、他の統計団体と合併し、国際統計協会 (International Statistical Institute 略称 ISI) に衣替えし、現在も 2 年に 1 度の研究大会を開いています。本部はオランダのハーグ近郊に置かれています。

(続)



アドルフ・ケトレ博士
(1796～1874)

郷土史料館の立て看板について

本誌の200号の特集記事で、史料館入口の立て看板について、現校舎の建て替え工事に際し、伐採された桜の木で造られたことを報じましたが、揮毫や篆刻をどなたにお願いしたかについては記録がなく、記載できませんでした。

その後、200号の記事を読まれた方から情報が寄せられ、揮毫は当時柿生中学校野球部の監督をなさっていた八尾先生が、岳父で書道家の清水眞司先生にお願いして下さり、併せて篆刻までお引き受けいただいたことが判明いたしました。

清水先生は書道家としては清水六穂(りくすい)と号され、篆刻家としても高名で、六采(りくすい)と号されました。看板に捺された二つの印は、柿生郷土史料館と揮毫された書道家としての姓名印と、文字を篆刻した篆刻家としての雅号印の二つを刻印したものでした。

清水先生ご自身から、八尾先生を通じて史料館にお便りを戴きました。二つの印について、詳しく綴って下さり、姓名印は捺すと白く出る白文印で、字体は漢代の篆書体だそうです。残念ながら15年の歳月による経年劣化で白く浮き出ていた文字は、朱色に変色してしまいました。雅号印は朱文印として「采



立て看板と看板の印

六」と右から左へ横書きされており、こちらは秦の始皇帝が統一制定された篆書体「小篆」で篆書されたそうです。

なお、清水先生は長く川崎市書道連盟会長を務められ、現在も川崎市書道連盟の顧問をお勤めになるなど多忙な日々を過ごされながら、今秋も書作展を開かれるご予約だそうで、現在も現役で活躍されています。



郷土史料館の看板に揮毫していただいた年の2010年の3月、かながわ書道まつりの開会セレモニーで実行委員長として挨拶される清水六穂氏

柿生郷土史料館 第97回カルチャーセミナー

夏菟共同塾と義僊師・祖関師

～若者に学びの場を提供した修廣寺の先達～

講師：菅原節生氏(修廣禅寺前住職)
日時：3月16日(日)13時30分～15時30分
会場：柿生郷土史料館(柿生中学校内)
特別展示室
参加費：無料 どなたでも参加できます。

明治期の柿生村には、5校の尋常小学校(4年制)がありましたが、卒業生が勉強を続ける際に進学する高等小学校はなかったのです。柿生村における高等小学校の誕生は明治32年(1899年)に高等柿岡小学校が誕生するまで、待たねばならなかったのです。校舎の完備した高等義胤小学校が誕生するのはその3年後明治35年(1902年)のことです。この間、学びの意欲に燃える子どもたち・若者たちを受け入れ、柿生地域の中等教育を担ったのが修廣寺の僧侶たちでした。

修廣寺前住職の菅原節生師をお迎えして、明治20年代～30年代初めにかけての修廣寺での学びの様子を、当時の記録を参照しながら振り返っていただきます。ご期待ください。

柿生郷土史料館 第98回カルチャーセミナー

治水と利水

～麻生川・片平川と三沢川～

講師：菊地恒雄氏(日本地名研究所事務局長)
日時：4月26日(土)13時30分～15時30分
会場：柿生郷土史料館(柿生中学校内)
特別展示室
参加費：無料 どなたでも参加できます。

昨秋『再考二ヶ領用水』を上梓された、日本地名研究所の菊地恒雄先生をお迎えして多摩川と鶴見川に挟まれた地域の人々が、どのように河川と関わりながら生活してきたのか、川の恩恵を受けながらも、暴れ川の治水に悩まされてきた諸々をお話しいたします。

皆様ご承知の通り、柿生地域の河川は、表題にある麻生川・片平川だけでなく、真福寺川や早野川もやがて鶴見川に合流するのですが、黒川を流れる三沢川だけは分水嶺が異なり、暴れ川で知られた五反田川などと共に多摩川に合流します。菊地先生が、難しい内容をどのように整理して語ってくださるか楽しみにご参加ください。なお、講演の最後に先生の著書『再考二ヶ領用水』のサイン会を計画しています。著書は史料館で販売します。(売価700円)

柿生郷土史料館 開館日のご案内 【参加自由、入場無料】

◎開館日 : 3月2・9・16・23日(日曜日) 4月5・19・26日(土曜日)
◎開館時間: 午前10時～午後3時